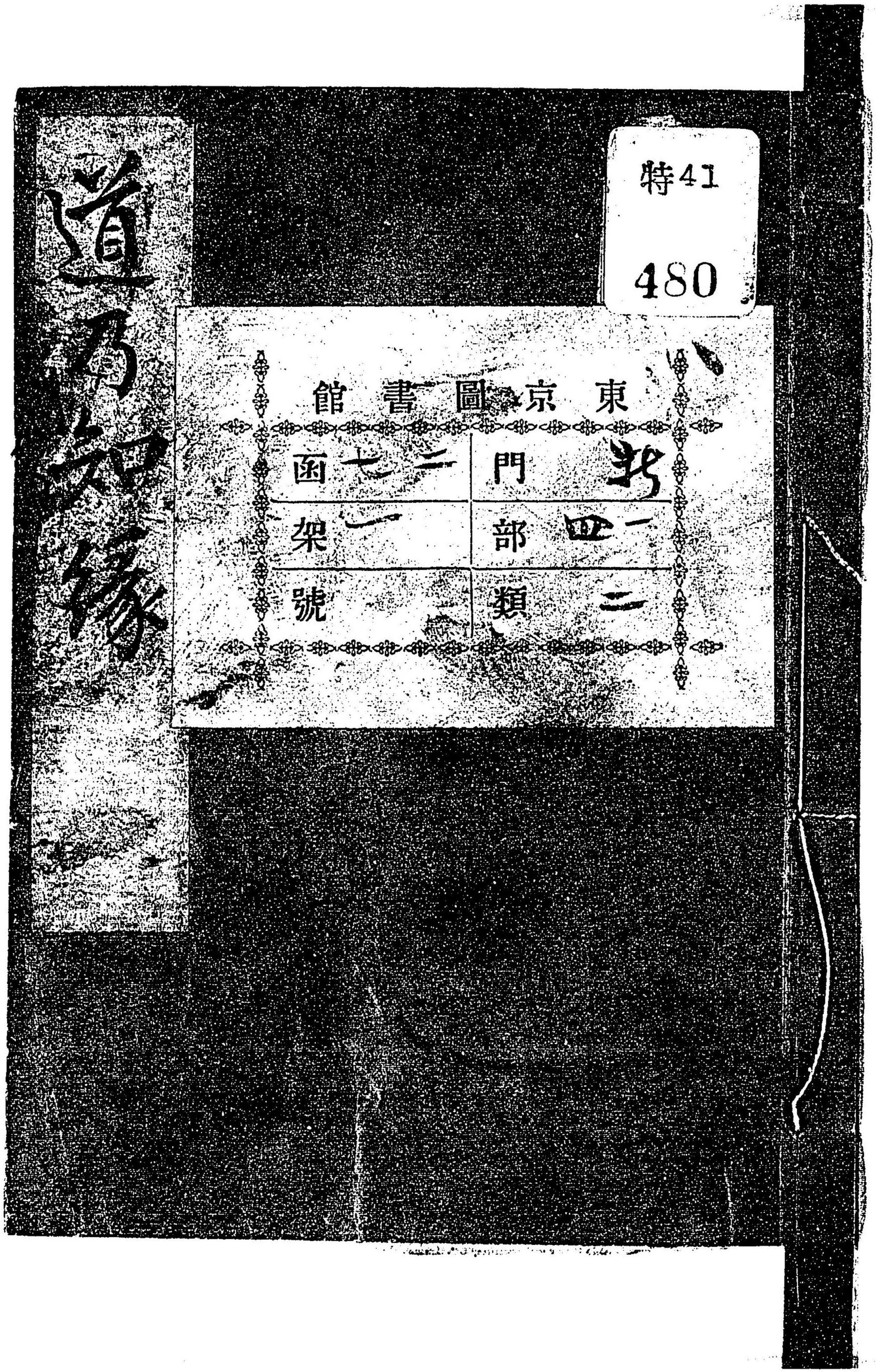


014655-000-9

特41-480

道乃知縁

星島　良平／述

M12

ABB-1087

東京圖書館藏

特41
480

道乃知緣

星島良平講
野崎在善記

道乃知縁

星島良平　講義
野崎在善　筆記

安房より成る　道乃栞より載せたる宗忠神の御詞　是は宗忠神我を離る修行よつきて毎々諭したまひし御詞か

安房といふは生付て理非も損得もしらぬ馬鹿の事よあらず我慢我欲をせず人ゞ無理不法をいかけても腹とも立てず心配ともせず安房

の虚心なるが如きを云ふ扨我慢我欲から出る智慧分別は大抵腹を立てると物を苦とするの二つがそふゐえ我身の利害に關る事は平生の智慧と不似合なる無分別が出て事の敗れをひきいだす事おほし故に宗忠神我慢我欲をせぬを腹をたて物を苦にせぬ修行に付て安房に成ると仰せられたり（以上安房とは以下成也とは云は修行して安房になる事あり生付て理非も損得もわきまらぬ真の安房は何の用にもたゝぬ不成人あり隨分理非をそなへ人情をわきまへたる者が修行して安房の如く虚心に成る時は自から天理に明らかに成るものなり下戸の生付て酒を飲ぬはのまぬだけの事にて何の詮もなし上戸が飲たき酒を嗜み禁酒して下戸に成る時はを れに付て万事をたしかに身行までよろしく成る者おほし智者も修行して安房に成きは眼前

の利害得失まよはぬ故天地の妙理を悟るべ
し宗忠神御在世の時備前岡山より相者の名人來
り事あり人の相をして善惡吉凶をいふに適
中せずといふことなし宗忠神人相を見せたま
ふに相者兎角をいはず宗忠神再三たづねたま
ひしかば相者御人相を篤と拜見するに全く安
房の御相なりといふ宗忠神吾多年安房に成る
修行せしが彌安房になりたるうとて大に喜び

たまひしとなり道家の言に知不知上不知知病
と云又君子盛德容貌若愚と云も彼安房に成る
事なり何の道も我慢我欲から出る小智を捨て
神は天地の大道に明らかはいらぬ物と見えたり
人智を去て天に任せよ
我を離るゝに付ての御諭
道乃禁に載せたる宗忠神の御詞
是も
對せし御道詞にて人欲の私より出る小賢き智
慧といふ人智を以てする事は天命にさかひ人

の思ふやうにからぬ故ますゝ分別だてをして罪よつゝと重祓天罰とかふむる事おそるべきことなり

以上人智を説以下天に任せよとは天命に縋りて万事をせよと云ことなり宗忠神天と仰せらるゝに兩意あり一は自然の天命一は天賦の分限あり自然の天命と云は造化の妙用にして不揃なる事にて昼と夜といりかはり夏と冬と由きかはる如く仕合のよき時もありあしき時も有又天道にさゝひ不義不将をしても一旦は繁昌する者あり道と守り義理を止てあら一時不仕合にあふ人あり是も自然の天命なり併し天道にさかふて繁昌する者は其繁昌却て行末大に衰微する基となり天道を守て不仕合にあふ人は其不仕合が後日開運の種となる事おゝし已にも作り出せし罪なくして不仕合災難にあふは所謂難あり難有にて難を難

と思はず難有く思て修行すれハ難この却て開運の種と成かり（以上自然の天命を説　以下天賦の分限を説）

と云は天より賦與したまひし人々の分限かり分はわかつといふ義よて萬物其形よりて為すべき務を生付けたまふをいふ梅の形と受きばすき實かり柿の形を受きばしぶき實かり猫の形と受きバ鼠を捕鶏の形と受きバ辰をつくり萬物天より受得し形よ付て為すべき務

あり殊よ人は一箇小天地ト云て尊き形を生付らきゝる物故上は朝廷より下ハ農工商よ至るまて各其身分よりて為すべ紀務ありき人事といへども天より生付らきとる形よりて生するかきバ人間の為べき務は皆天より賦與したまふとのかり（以上分と説　以下限と説）限はかぎりと讀て是より内は我ゞ自由よかり是より外は我ゞ自由よからぬと云限界かり万事其限界をき

える所より他人の迷惑となり色々の悪事も出
來するなり譬ば牛が野の草を食ふハ牛の限内よ
て牛の自由なりとし畑よ入て蘿蔔とくふ時は
牛の限をあゆるなり人も天より受得し限あり
限内の事は皆天のたまとの命は日よ天恩の
難有事を忘れず面白く樂く心と活して修行
すれは自から牛ゝ畑の蘿蔔とくらふやうなる
不埒は出來ぬとの也 以上限を説以下天賦の分と自然の天命を合せ説

總く人の吉凶禍福ハ自然の天命なれども已が
分をたとり限を越る處より不仕合よあふ人
おはし是も天の賦與をたとりよせし罰なり
該流の修行は天賦の分限を盡して其上を自然
の天命よ任すの外なし宗忠神御書翰よ唯身の
分限を知り其上は何事も天命よ御任せ被成候
より外よ致方無御座候とありて分限を明よす
るゝ修行の第一なり近來は開化の世となりて

田夫野人ゟ至るまて權利義務の二ツをとき
へる事ゟおりたり義務は即ち分の事おり權利
ハ即ち限の事おり只理ぜめでするのと難有く
面白く思ふてするのとかはりゝ有るまでの差
おり扨て宗忠神天とおゐせらるゝゟ天賦の分
限を主とし玉ふと自然の天命を主としたまふ
と時ゟよりてかはり有り此所の〔人智を去て天
ゟ任せよ〕の天は自然の天命を主として仰せら

る、おれども天賦の、分限を怠たらぬ事は自ら
其中ゟおもきり」以上分限天命と合せ説任すと云ハとりす
がる事ゟて譬は師匠が童子の手を取りて筆勢
を教ゆるゟ師匠ゟ筆を任せぎれバ上達せず併
師匠ばゝりゟ筆をは祢まかせ手前をゆるかせ
ゟしては又上達せぬものゟて師匠ゟ筆をまか
せ中ゟ此方の手ゟ油断せず相持ゟて筆勢を
おぼゆる如く小黠き小智を捨て天道ゟ縋て人

々の分限を勉強するを人智を去て天に任とい
ふ以上任念をつぐむ道乃祭に載た宗忠神御詞是も御道詞
を説
て我を離るゝ付ての御諭かり念は心にとめ
て物を思ふことをつぐはつゞける意にて心
に思ふ事に一ツ有と夫に付て色々の事に思は
るゝを云宗忠神御講話に哀き事は匂論嬉しき
事にても一ツ事をあとやさきと永く考るゝ心
の疲れいたむとのなり又物を考へる時は端坐

してかむがゑべし又夜臥床に入て物を考るは
別してよろしからず若し雑念おこりて森られ
ぬ時は息を数べる時は自から祓らるゝ物かり
と仰られたり氣の弱き人婦人がさまは別して
大切なる御教かり何事も活し上手に成れ道乃祭に載せ
たる宗忠神御詞
是は活物を捉えるに付ての御諭かり
何事もといふは易事難事まうゝはらず廣く万
事の上を云活し上手といふは例の御道詞にて

人の心の枯たるを活すと事の敗亡とかるべきを活し全くするとの二つあり心の枯たるを活すとは氣分をからして居る人を氣分の勇み張合のつくやうに氣分をとりかへるを云事を活すとは形をはおれ圭角をとりて難事も丸くやはらけ事のやすらゝに濟やうにするを云扨て世の中の事大方形ばかりきれ身をおろすまゝと思ふに付て心をおろし心を殺すから何事をしてもする事ゝ皆死るあり故に事をいっさんと思はゞ先づ形をおろすべし形さへ死ぬれば心ゝ活るゆへ何をしてもする事が皆活るあり宗忠神御講話に名高き不和かる家と睦き家あり或先生不和の生ずる本と睦く暮すもとを探索せんと思ひ先づ睦き家に行てこゝに老爺ゝ大鍋を買てかへり内庭におろし草鞋がけで上り口に腰をかけ煙草をすふて居るを息は角と

も知らず二階より割木を投下鍋の碎し音よて
はじめて心付早々二階よりおり両手をつきて
謝罪をいへば老爺木二階の直下よ鍋を置きた
は乃翁の無念て有さと云老嫗妾が鍋を直よと
りのけぬ故このやうなる事ゝ出來た勘忍して
たもれと云新婦奥より出て姑嫜は郎君の木二
階よ上て居られるゝ御存がなき故氣の付ぬは
あたりまへ妾は兼知して居ながら鍋をとりた

ける氣ゝ付ぬと云は全く妾の不行届でありま
しと云老爺いやゝ是は孰の罪でもあるまい
割木ゝ頭上よおちて頭が碎ける厄ばらいよ鍋
ゝそれとのて有らふ人よ怪我ゝなくて何より
目出度と云て家内圭角節なく丸く事すたり
又不和なる家よ行て様子と見て居たれは老爺
ゝ酒を買てかへり壱舛徳利を上り口よ置てそ
のまゝ忘れて居しを息が外よりかへり誤りて

その徳利を蹴おかし此様な通り道へ徳利をおくゞ悪いと云と老爺ゝ奥ゝら出汝が足もとよ氣を付けぬがてるいと云ふ老嫗ゝ出ていや此のとゞり道へおきと老爺が悪いと云老爺腹を立て汝が氣を付ておくへ取込ぬがてるいと云老嫗新婦とよびてとしは眼がうすひ徳利を取上ぬは汝の無念じやと云新婦妾は奥よ居て何も存ませぬと云是ゝ本よ成て大喧嘩ゝ出來と云噺ゝ有る睦き家は面々がてる物よかつて我身を出ろす故万事ゝ生て丸くとさまり不和ある家は己善き物よかつて我身を生さんとするゆへ何事も死る」と仰られたり道の修行は万事油断かく活して活して上手よ成るが第一かり上文の御噺は元來心學者の常談よてせの人孰もよく知りたる噺おれども弁聽せしまゝと演説す然し知年のこぎり故精細よ記應せさる箇所は其後心學噺よて聞しを以て之を補ふ

明治十二年五月廿四日出版

講者　士族　星島良平
岡山縣備前國上道郡
中野村居住

記者
兼出版人　士族　野崎在善
岡山縣備前國岡山區
天瀨居住

定價三錢

星島良平講
野崎在善記

道乃知縁 二篇

道乃知縁 二篇

星島良平 講義
野崎在善 筆記

〔慢心を去き〕道乃祭より載せたる宗忠神の御詞 是は我を離まる修行より付ての御教なり慢心はおごるもの〻ろと訓て我身をたゝぶりて人をあなどる事なれども宗忠神は文字の義よりはらず満心の意より説きたまへり御在世中の御講義より何時も〔まん

右んはみつる心とゝふ事あり」と仰せられたり
夫故文字は慢心と書てありても満心の意なと
くが當流のならはしなり扱みつると云ゝ両義
あり宗忠神道はみちをつる」と仰せらるゝは日
神生々の御陽氣天地よりたゝ〳〵て万物を生々
養育したまひ人その御陽氣を體し勇敢く面白
く心氣をたゝ〳〵て万事の務をなす事なて是形
なき活物のみつるおとなり又「みつればかぐる」
と仰せらるゝは形ある物のみちて盛なれば必
ずかげて衰へる事を戒めたまふなり心氣のみ
つるは善けれども形の上よりみつきてみつるは悪
し彼の慢心のみつると云は形の上ゝ属てそちら
ほこる事なて我身の才智藝能ゝほこり金銀田
畑の多きゝほこるの類なり天道は盈るをかく
したまふゆえ才智の勝れ藝能ゝ達せしゝ慢心
すれは才智ぐゝらゝ藝能ぐさぐり富貴ゝ慢心

すきは驕奢よ長ドもては貧賤よなるかり是み
つきばかぐると云とのかり宗忠神の御講話よ
〈慢心が生るとオも藝も益よたゝぬ物なり五明
樓呑計はト筮の名人かりしが或分限者より只
今御出被下とまをし來りしかは呑計何用なら
むとて机上の筭木をなげて卦をおこし水よ縁
あり一杯此ますのゝと云てあはたゞしく驅い
でゞ誤りて路上の小便坪よはまりし事あり

呑計はどの名人も我判断は外きぬと慢心せし
より生よ一度はづれしと云へり恐るべきを
なり〉又慢心すると人の惡きことのみよ目が付て
我が身の上が暗くなる物かり古歌よ鏡山大の
志がゝらさき見えて我が身の上はかへりみづ
海或瞽師懇意かる人の許よ行て夜よいりてか
へらむとす主人提燈と出し貸しかば瞽師わく
らは提燈を借りても無益かりとて断るを主人

向からくる人が見て避てくれるゆえ持てかへ
りたまへと勧るゆへ瞽師成程と思ひ提燈を提
てかへりしよいら様向ふよりくる人ら盲人と
と知て皆よけてくれ人よゆきあさる心配おく
隣村までかへりしゆえいよ〳〵氣遣おしと安
心して歩行しが忽ち一人つきあたり瞽師あは
むきよ倒れやう〳〵起きあがり大よ立腹して
奴輩目をあちて何用よするぞ明きめくらよと

罵りれば突きあたりし人も大よ怒り左右い
ふ奴は真の盲目であろふがといふ瞽師吾がめ
くらは知れたと盲目よ突きあたる奴がめくら
どやこの火が見えぬうと云て提燈を鼻先へつ
き出したれば突きあたりし人それが提燈ゥ火
は熄て居と云て大笑したと云話がある此の瞽
師も提燈さへもたねば用心する故人よ突倒さ
れることはおけれども憖よ提燈をもちて我れ明

るいと思ふ慢心から突倒されしあり世の人少しの才智や學問の有るを特み已れ明るき者と慢心する所より身を誤る者おほし世よ慢心はどおそろしき物はおし外のことはよく勤りても慢心ばゝりは去りがたし神の御場合よりても罪よは慢心のいづることあり恐るべきことあり」と深く戒いたまへり「善人の罪を作るか」道乃栞より載せたる宗忠神の御詞此は我を離るるよ付ての御教あり罪はつもる或よて小き惡事も改めぬと段々よつもりて罪となり終よ天罪をうけ朝廷の御刑罰をかうむることあり扨善人よ罪はかき苦かれども世よ善人といふは大抵柔和にして氣の弱き人多きことのよて善を行ふに付て諸事心配して明暮心を痛め陰氣かる人あり簡樣かる生付の人は義理かたく親切かる故人目には善人と見ゆれども大御神より分て賜りし心を痛める故大御

神に對し奉て大なる罪となるなりそれゆへ身に善を行ひながら眼前不仕合なる人おほし此れ心を傷める罪を天が罰したまふなり天心講義より天心講義は宋忠神の御詞を筆記せしなり書なり今抄出して上文の證とす〔人は身も心も天地のあづかり物なりて決して我もの
より非ず故に我がとれと思ふ我さへ天の我れ我物とはなせる罪科我物のやうに思ひ有るばあるに付き無けれはなきに付て心を傷め見れ

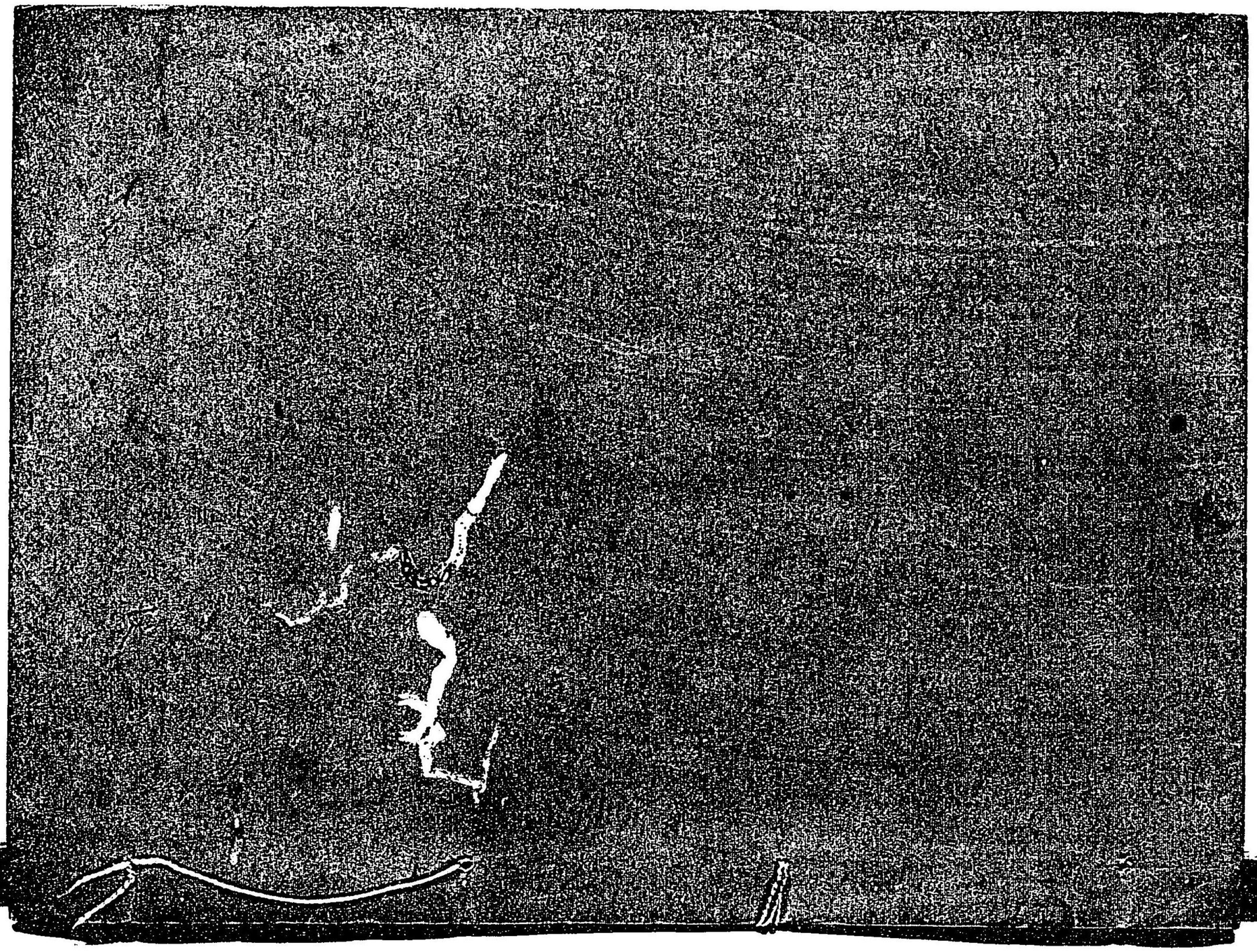
ばみるに付聞けばきくに付て心をいさめ二六時中から晩まで心をいため通しにするなり是大なる罪なりつみは積もると訓ず善人に罪あり如何とおもはれば善き人は心やさしき故見るたび聞くたびに心をいためるなり是大なる罪なり此罪つもりて病となる氣の毒千万なり〕以上天心講義と本書のまゝに記すと説きたまへり元來人の病苦災難たあふに三ツの所以あり自然の天命と惡人

の罪と善人の罪あり自然の天命と云は己が作り出せる罪あく自然の天命よりて大病をわづらい不仕合にあふことあり宗忠神も大病をわづらい災難にあひたまふこともあれども天命に任せたまふゆえ所謂難あり難有たて難を難と思はず難有く思て御修行あさまし故難が反て仕合の種となり難よあひたまふ度ごとに道に進たさへり是自然の天命あり己が利欲勝手と

恣にし人の分をおかし人の心を傷めさせ生々の天心を傷め奉るに至る是れ悪人の罪あり世に善人と稱せらるゝ人は大抵人の爲に善き様人が心配せぬやう人が難義せぬやう人の腹を立てぬやうにと万事心配する故人は喜べども人の爲をおし人をよろこばすに付て此方の心を傷め彼の生々の天心を傷め奉るが善人の罪あり悪人の罪は人が咎め政府の刑罰を蒙るゆ

え天の御咎めは反て綏〜善人の罪は人が罰セぬ罰え天の罰ゝ甚ゞすみやゝかるとのあり道と修行する人は勇敢面白〜思て善を行ひ身たも心にも罪をつくらず天地生々の御心に順へは目出度生榮こゝ仮令自然の天命にて病苦災難にあふとも彼の難あり難有にて禍ひが反て福の基とあり禍津日神の禍事も直毘神の吉事たと直しにまはんと疑ひあるべからず

明治十二年七月廿八日出版　定價三錢

講者　士族　星島良平
岡山縣備前國上道郡
中野村居住

記者
兼出版人　士族　野崎在善
岡山縣備前國岡山區
天瀬居住